〈アメリカ合衆国 フロリダ州 セント・ピーターズバーグ市〉

高　松　市（姉妹都市）

# 市民親善使節団報告書

1999年9月26日～10月3日

Takamatsu International Association

財団法人 高松市国際交流協会

# 目　　次

Ⅰ　市民親善使節団員名とホストファミリー……2

Ⅱ　日　　程　　表……3

Ⅲ　アメリカ研修記録……4

Ⅳ　市民親善使節団員報告……23

# 市民親善使節団員名とホストファミリー

| | 氏　　名 | セント・ピーターズバーグ市　ホストファミリー |
|---|---|---|
| 1 | 中　塚　貞　雄 | Mr. Emmanuel Roux & Ms. Jennifer Hardin |
| 2 | 佐　藤　義　則 | Mr. Emmanuel Roux & Ms. Jennifer Hardin |
| 3 | 岩　田　武　夫 | Mr.&Ms. John Kone (Connie) |
| 4 | 秋　山　博　子 | Mr.&Ms. Tom Oberhofer (Signe) |
| 5 | 川　田　有　花 | Mr.&Ms. Will Michaels (Kathy) |
| 6 | 葛　原　由　起 | Mr.&Ms. Will Michaels (Kathy) |
| 7 | 塩　津　陽　子 | Mr.&Ms. John Kone (Connie) |
| 8 | 藤　本　美佐子 | Ms. Jackie Shewmaker |
| 9 | 丸　浦　静　香 | Mr.&Ms. Bill Wallace (Sally) |
| 10 | 渡　邊　多恵子 | Ms. Vicky Baker |
| 11 | 吉　岡　御井子 | Mr.&Ms. Bill Wallace (Sally) |

# セント・ピーターズバーグ市への市民親善使節団日程表

| 日次 | 月　日<br>（曜） | 地　　名 | 日　　程〈宿泊地〉 |
|---|---|---|---|
| 1 | 9月26日<br>（日） | 高松駅発<br>関西空港着<br>関西空港発 | 貸切バスにて関西空港へ<br><br>空路，デトロイト経由タンパへ |
| | | デトロイト着<br>デトロイト発<br>タンパ着<br>↓<br>セント・ピーターズバーグ | セント・ピーターズバーグ市長，ホストファミリー，市職員がタンパ空港まで出迎え<br>ホームステイ |
| 2 | 9月27日<br>（月） | セント・ピーターズバーグ | 市役所にてフィッシャー市長表敬訪問<br>USF図書館見学<br>スカイウェイ・ブリッジ見学<br>ダリ美術館見学<br>両市長による記念植樹<br>ホームステイ |
| 3 | 9月28日<br>（火） | セント・ピーターズバーグ | ミラーレイク図書館見学（姉妹都市の展示がある）<br>パームショアーズ高齢者施設見学<br>ピア見学<br>レッドウッズで昼食<br>ファイン・アート美術館見学<br>トロピカーナ球場レストランにてデビルレイズの試合観戦<br>ホームステイ |
| 4 | 9月29日<br>（水） | セント・ピーターズバーグ<br>↓<br>オーランド | 市役所前集合<br>専用バスにてオーランドへ<br>ディズニーワールド視察へ<br>（オーランド泊） |
| 5 | 9月30日<br>（木） | オーランド発<br>デトロイト着<br>デトロイト発<br>ラスベガス着 | オーランド市内視察へ<br><br><br>（ラスベガス泊） |
| 6 | 10月1日<br>（金） | ラスベガス | 終日，グランドキャニオン観光<br>セスナ機にてグランドキャニオン空港へ<br>（ラスベガス泊） |
| 7 | 10月2日<br>（土） | ラスベガス発<br>ロサンゼルス着<br>ロサンゼルス発 | 空路，ロサンゼルス経由，帰国の途へ<br><br>（機中泊） |
| 8 | 10月3日<br>（日） | 関西空港着<br>関西空港発<br>高松空港着 | |

# アメリカ研修記録

記録担当　秋　山　博　子

はじめに

よくぞこれだけばらばらな人たちが，とりとめもなくピックアップされたものだと，誰もが感じた最初の研修。変更重なる旅程表やら受け入れ先の情報の少なさに，ますます不安が募りまくり，ほんとに選ばれてよかったのかしら，なんてことまでチラッと感じちゃった二度目の研修。しかし，姉妹都市親善使節団の市民代表に選ばれたという名誉は捨てられず，なによりかなりはっきりしていそうな吉岡事務局長にむかって，お断りする勇気も，逆らうエネルギーも持ち合わせないまま，我々十人はとうとう出発の朝９月26日を迎えていた。

高松市民という以外何のつながりももたない十人の面々が，ＪＲ高松駅の待合室に三々五々集まってくる。協調性にかけた不遜（？）な同志の顔を見るにつけ，胸の不安はいやでも高まる。ああ，自分はともかく，あとの人たちのくじ引きみたいなすごい人選（と，多分みんな思ったのだ）！年齢なんか半世紀くらいの開きがあるし，職業にいたっては，学生から会社のオーナーまでもうばらばら。ただの団体旅行のように適当に付き合うわけにもいかないっていうのに，ほんとにこれから八日間，どうなるのだろう？もしかしてこれって何かの陰謀？

が，その中に，軽やかに歩きながら，噴水のように笑顔を振り撒く，グレイト・ウィッチ・吉岡御井子事務局長がいた。その責任者の摩訶不思議なオーラ，張本人でありながらあのお気軽な身のこなし。だのにみんないつのまにか荷物をまとめて立ち上がり，ひきつけられるように彼女に集まっていく。気が付いたら関空行きのバスにゆられて一路目的地を目指していたのだ。「よし，こうなったらからにはがんばるぞ」なんて互いの胸に言い聞かせ，これから出会うであろう新しい体験に心を膨らませながら。

局長のニックネームは最後につけさせていただいたのだが，すてきな魅力であれよあれよとみんなを巻き込んでいく彼女の魔法は，このときから確かに利き始めていたのだ。

| | |
|---|---|
| 人　　口 | 243,800人 |
| 面　　積 | 148.48 km² |
| 年間平均気温 | 23.3℃ |
| 年間降水量 | 134.9 mm |
| 年間日照日数 | 361日 |
| 交　通 | |
| | ニューヨークから飛行機で1時間30分 |
| | ロサンゼルスから5時間 |
| | タンパから車で30分 |

**9月26日**

**9:30　高松駅にて出発式**

増田高松市長，諏訪市議会議長ら公式団の方々と顔を合わせ，藤本国際交流室室長の司会で出発式が開かれる。全員で写真撮影のあと，大勢の人たちに見送られながら，関空までの貸し切りバスに乗る。このとき初めてほんとに選ばれたんだ，この人たちと一緒に行くんだと実感したのは筆者だけではないはずだ。バスから眺める高松の空は珍しく薄曇り。でもこの空は間違いなくフロリダのセント・ピーターズバーグ市までつながっている。それを証明してくれる最初のトランスポーテーションであるこのバスが，飛行機に変わって日付変更線を超え，米国の巨大な空港の歩く歩道に変わってまた飛行機に変わり，亜熱帯の目的地に我々を運んでいくのだ。

荷物を横の座席に置きながら，しばし別れる高松の町並みを眺める。もうすでに懐かしくなっている気持ちを抑え「行ってきます！」。

**10:50　車中での自己紹介**

津田を越え，徳島県に入ったあたりで，全員の自己紹介が始まった。「あちらの市長との約束もあり，今回のアメリカ行きになりました。初めてなので大変楽しみです」という増田市長，「英語はボディラングエッジでがんばります」とは諏訪市議会議長。みんな不安と期待の胸中は同じなのだ。そのころには全員が少しずつ打ち解け始め，席を移動して話し始める。しかし，関空まではまだまだだ。

**11:50　鳴門リゾートホテルでの昼食**

**14:00　関空着**

今回のセント・ピーターズバーグ側の市民代表である，エマニュエル氏とジェニファーの素敵な結婚式のビデオをうっとり見ているうちに，バスはいよいよ関空へ到着。航空券を受け取り，荷物のチェックなど出国の手続きを各自行った後，免税店をのぞいたり，コーヒータイムを楽しんだりして，全員，定時刻に所定のゲートに。中でも，渡邊さんは早々にゲート近くのトイレに陣取り，顔を洗い，お肌の手入れをして，飛行機で眠る準備をすませていたのはさすがである。海外旅行など犬の散歩ぐらいにしか思えないメンバーは佐藤さんをはじめ数名いて，心強さを感じてしまう。ただ吉岡局長だけは頭の数を常に数えて迷子が出ないように気を配っていらした。ああ，メンバーがみんないい子であるように，と自分を含めて，彼女のために祈らずにはいられない。

**16:30　関空発　ノースウエスト航空にてデトロイトへ**

長い道中のメインイベント，いよいよ飛行機が日本を飛び立った。行き先はアメリカでも端の端，冬でも泳げちゃうフロリダである。簡単に行けるはずもないけれど，この空の旅は長かった。飲んではまどろみ，食べてはトイレの順番を待つ，狭くて作られた夜が延々続く。やっぱり地球はでかかった。

**15:00　（現地時間）　デトロイト空港着**

無事アメリカ入り。ここでの待ち時間は四時間と長く，素敵なティールームで全員くつろぐ。佐藤さんがひとり，次の飛行機のゲートまで行ってしまって，またまた局長が心配する一幕もあったけれど（まったく旅慣れている人たちを束ねる苦労とはいかばかりでしょう），元気なメンバーたちはそれぞれ写真を撮ったり，家族の話をしたりしてリラックス。

**19:10　デトロイト発，ノースウェスト空港にてタンパへ**

全員の頭の中には，タンパ空港で出迎えてくれるホストファミリーのまだ見ぬ顔が想像力で形成されていたに違いない。とうとうここまで来てしまった。長い旅にも終わりがあるが，最後にはやっぱり最初の緊張を思い出すもの。さあ，うまくやれるでしょうか。自分の英語は通じるかしら。それより自分を好きになってくれるかな？ああ，長旅でこんなにばっちいのに等々，わからんことを考えながら，一路南下する飛行機の中で，機内食で出されたピザをメンバーはひたすら食べる。

**21:40　タンパ着**

感激の瞬間だった。きれいな空港のロビーに，夜だというのに大勢の人が出迎えに来てくれていた。知り合いを見つけた人たちは握手し，抱き合っては再会を喜んでいるし，初対面のメンバーもすぐにファミリーを見つけて紹介しあっている。笑顔とウェルカムの心がありがたく，英語が通じなくてもほっとしてしまう。来てよかった，来られてよかったと，それぞれが思った一瞬，さぁ，ここでの三日間せいいっぱいやろうと，みんな心に誓った一瞬である。各自，ホストファミリーの自家用車でそれぞれの家庭へ向かう。フロリダには珍しく雨模様だったが，すいている広いアメリカの道を気ままに走るファミリーの運転に，すでにアメリカを感じている。ここと四国高松がつながりを持っていることの不思議さ，おもしろさ。ああ，それにつけてもJR高松駅を出発してから25時間を越える時間が経過していた。何よりベッドが恋しい！

**9月27日**

**9:00　市庁舎に表敬訪問**

今朝も，昨夜の雨が少し残るあいにくの天気。インナーポーチから見渡せるフロリダの海は，薄水色に広がっている。朝食は暖炉のある広いリビングにセッティングされたダイニングテーブルで。室内は上下左右にゆったりしていて装飾は趣味がよく，ああ，とってもリッチな気分。メニューはブルーベリー入りのパウンドケーキと薄めのコーヒーで，後でメンバーに聞くと，どこもそれぞれの家族が普段取っているものを提供されたということだ。フルーツとスープの家族や，オレンジの砂糖煮とフレンチコーヒーだけというところもあった（これはちょっと大変かも。）もちろん，トーストに卵にサラダという家もある。こんな風に普段どおりにできると，ステイを受け入れるのも気が張らなくていいだろう。なにしろ，筆者は三日間同じケーキを食べましたので。

「必ず午後からは晴れますよ」と，天気予報を無視した温かい言葉に励まされ，ダウンタウンにある市庁舎にファミリーの車で向かった。町は清潔で道路は広く，これが高松と同じほどの人口を抱える市の中心街なのかと疑いたくなるほどすっきりしている。日本ならこの敷地だと三倍の建物が建ち，五倍の人間がうろうろしているはずである。建設中の高層マンションが青白い空に向かっていくつもそびえているのが目に付いた。ファミリーに聞くと新しいコンドミニアムだという。町の人口は順調に増加し，経済は上り調子で，不動産の価値は下がらず，人々の暮らしは安定しているのだとか。なにより市の中心がこんなに空間にあふれていることを羨ましく感じているうち，車は市庁舎前に着いた。クリーム色の清楚な建物の壁には「ようこそ，セント・ピーターズバーグへ！」の垂れ幕が掲げられている。さあ，いよいよ公式行事の始まりである。メンバーは順次到着して，緊張気味のまま建物に入った。

そこには市長をはじめ，市議会のメンバー，国際交流協会の方々，カメラマンなど大勢集まっておられ，会議室に公式団とともに招かれた。

セント・ピーターズバーグ市のフィッシャー市長から歓迎の言葉が送られたあと，増田市長がお礼の言葉を述べられた。

「昨年の約束どおりこうして来れたことを喜び，またこのように歓迎していただけたことに感謝して

います。四十周年に向けての記念行事を話し合うための訪問でもありますが，この四日間で楽しい交流ができ，両市の友好が世界平和に貢献できることを願っています」次に諏訪市議会議長が「今朝，ホテルの窓から見渡せた美しいフロリダの海に感動しています。次回高松市にいらしたときは完成したウォーターフロントをお見せできると思います」と挨拶されて，それぞれ一同の拍手を浴びた。

引き続いて，市国際交流協会副理事長の樫村さん，姉妹都市委員会副会長の十河さん，市議会事務局長の重利さん，市国際交流室の藤本さんなど公式団の紹介があり，市民団が順番に挨拶した。みんな緊張気味だったが，いみじくもメンバーの渡邊さんが「マイ・ドリーム・カムズ・トゥルー」といって，我々の思いを代弁してくれた。両市がそれぞれプレゼント交換をしたあと，市民団団長の中塚さん(我々は彼を尊敬し，彼は後にＯＵＲ・ＢＯＳＳ・中塚と呼ばれる)がお土産を手渡してムードは一気に開放的となり，みんな立ち上がって名刺交換や雑談に花を咲かせた。立場を抜きにしても，地球の反対側の人たちとこうして話ができることはなんとも不思議で新鮮だ。我々の最初の公式行事はまずは滞りなく終了した。

つづいて二階の市長室を見学し，我々は市議会室に招かれる。八人の市議会議員の席が長円形に配されたその部屋は，威厳を持ちながらも明るい色彩で，隔週開かれるさまざまな会議の様子が目に浮かぶ。すべての設備が必要を満たす程度に作られており，絵画や明るい色彩使いがいわゆるお役所的ではない。こんな配慮が訪れるものに威圧感を与えず，開かれた市制につながるのかもしれない。

### 10:15　USF図書館見学

サウスフロリダ大学は，南部でも有数の優秀な大学で，メインスクールはタンパにあるが，セント・ピーターズバーグ市にもそのブランチがある。この図書館はそこに属するもので，市民団の秋山(会話の中に岡山弁が圧倒的に登場するので，オキャヤマ・秋山というニックネームになった)のステイを受け入れているシグニーさんがライブラリアンだ。彼女にＵＳＦ・セント・ピーターズバーグ校のヘラー学長を紹介され，彼は同大学が21世紀に向けて規模を拡大し，インター

ナショナルスチューデントにもきわめてオープンなキャンパスをめざしていることを述べられた。海洋学や犯罪学，ジャーナリズムなどさまざまな分野に目を向けているとかで，地球規模の教育が姉妹都市で行われようとしていることに，みんな感銘を受けた。同市が経済的に安定して大きな問題を抱えていないので，文化教育面に目が向いているのだということをうかがわせる。小さな町でも夢はでかい。見習わなくては。

市の百年史などの展示を見学したあと，二階のミーティングルームでスタッフたちにドーナツとコーヒーをいただく。図書館のディレクター，キャッシーさんや，交流協会のコニーさんらが同席して，女性の雇用などについての質問に答えてくれた。日本では一部の例外を除いては結婚後の職場復帰（パートなどの周辺職でなく）はきわめて難しいのに対し，ここでは日本ほどの産休の給与は出されてないものの，元の位置への復帰は可能で，休みも多くとれる。シグニーさんも夫の休暇に合わせてこの夏三週間のヨーロッパ旅行をされたそうだ。働くときはきっちり働くし，実力主義で厳しい反面，福利厚生の面ではやはり充実しているのだと感じざるを得ない。題目だけでなく実際に気を使わないで休みが取れたり，そのあともとの仕事に復帰できるということがなければ，本当の福利とはいえないだろう。

バーチャル図書館には24台のパソコンが設置されていた。自宅にいる学生が図書館にメールを送って質問できたり，米国はおろか世界中の情報がたちどころに開かれる仕組みになっている。ここを十分に活用すれば，図書館の容量のさらに何十倍もの知識が誰にも容易に得られるのだ。今に生まれた学生たちをうらやましく感じたのは筆者だけではあるまい。知識への欲求がふつふつと起こる！あ，その前にインターネットを覚えなければ。

### 12:00　オレンジブラッサム・カフェで昼食

市庁舎に程近いこのレストランは，同市でも古い建物のひとつであるセンピータイムズ社のビルにある。中は大変広く，円卓が優雅に並べられた１階の壁面のぐるりに，体育館の観覧席のように２階の席が設けられている，ここなら下のダンスパーティーを眺めながら食事なんてこともできるのだろうな，などと貴族的に思ってしまう。バイキング形式のメニューから，みんなそれぞれ好きなものを取り分けて，交流協会の人たちとともに二階で食べた。我々日本人のほうがたくさん食べるのに少し驚く。比較的太りにくい体質ということもあるのだろうが，アメリカの知識階級が自分をコントロールすることを常に心がけているという一面を見た気もする。ほとんどの人がタバコを吸わないし，後に開かれるパーティーでもけっしてお酒を飲みすぎなかった。そうやって常に自制心を心がけながら厳しい社会でやってきたのだろう。と，感じ入りながらも，とりあえずチキン，ビーフ，パスタ，パンなど，皿いっぱいの料理をお腹に詰め込んだ。日本には「腹が減っては戦ができない」ということわざもある。

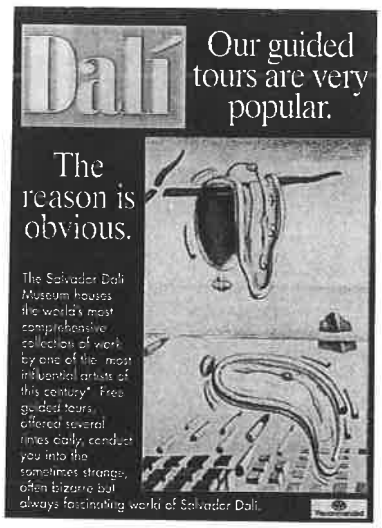
### 13:35　スカイウェイブリッジ見学

タナカ･アキコさんという，センピーに住む日本人女性がガイドとなって，我々はバスに乗り込み，市街地からタンパベイエリアを見学した。古い教会があちこちに当時のままに残されていて，1927年に建造されたものは，公共便所と同じデザインだとか。セント・ピーターズバーグという名前の由来の説明もあり，２人の設立者が25セント硬貨で賭けをして，勝ったほうがロシアの町の名前をもじったということである。

そうこうしているうちに，外の景色はカリフォルニアの空と海の色で青一色になっていた。かなたにかすんで見えるのは，中央がわずかに盛り上がって，カーブを描きながら左右に長く伸びるスカイウェイブリッジの優雅な全景である。1980年に前の橋が不幸な事故で破壊されたあと，安全性を第一に作られたこの構造体は，与島にかかった瀬戸大橋に似て，白い白鳥のように美しい。カメラスポットに停車してもらって，橋をバックに全員の記念撮影。「あら，島がひとつもないわねぇ」とはウィッチ･吉岡局長。確かに。多島美の瀬戸内海とはまた違う，あくまでものびやかなフロリダの海である。ああ，この景色のどこかでなつかしの瀬戸内海を思い浮かべた。

## 13:00　ダリ美術館見学

地元のエッカードカレッジを車窓から見学した後，一行は世界的にも有名なサルバドール・ダリ美術館に向かった。美しいタンパ湾のヨットハーバーを前に，近代的なベージュの建築物がひときわ目を引いている。1300点以上にも及ぶ膨大なダリの作品は，かつて彼と親交の深かったモース夫妻のコレクションで，市に寄与されたものである。壁一面を覆うばかりの宗教的な大作や，だまし絵技法を使った複雑で寓話的な作品，あるいは「テーブルになるフェルメール・ファン・デルフトの亡霊」など，愛好家でなくても一度は美術の本などで見たことがある名画が，迫力をなして我々を圧倒する。このような，芸術的価値の計り知れない未来への遺産を同市が保有していることに驚くほかない。




しかも我々は，作品を寄贈したモース夫人本人にもお会いできたのだ。かなりの高齢だが美しく気品高く，しかも自然な物腰で我々に対してくれた。豊かさを真に体現した人ならではの温かい笑顔。メンバーの一人，岩田さんはその日の朝，不幸なアクシデントで新品のビデオをおじゃんにした身の上なのにもかかわらず（そんなわけで彼のニックネームはロス・ビデオ・岩田となった），香川の新進画家の描いたポートレートを彼女に手渡し，香川にも気概のある芸術家がいることを熱心にアピールしていた（えらい！）。

16:30　**記念植樹**

手入れの行き届いた芝生が涼しげな風にそよいでいるダリ美術館の前庭で，両市市長など一同が集まって，記念植樹が行われた。我々メンバーも鍬入れをさせていただいて，まさに歴史の１ページを飾った気分である。この木が大木となる日まで，両市の友好が続き地球が存続し，宇宙が平和でありますように。そして，もう一度この木を見にくる機会があることを個人的に願って，細い苗木にフロリダの土をかけたのだった。

19:00　**エマニュエルさんのお宅でガーデンパーティ**

まったく盛りだくさんであわただしい一日だったが，夕食は思いもかけず味わいも深いものになった。

センピー側の代表者で，レストランを経営なさっているエマニュエルさんが，メンバーとホストファミリー全員をガーデンパーティに招待してくれたのである。こんもりとした林の中の美しい住宅街にそのお宅はあり，樹木に覆われた中庭には，クロスをかけたいくつかのテーブルがフォーマルにしつらえていた。バーベキューかなにかを想像していた我々はすこしびっくりしたが，集まってきた人々の気軽さと，おいしい食前酒の力で，いつのまにかリラックス，旅の疲れもほぐれていくようだ。独特のカニ料理や南米風（？）のライス料理などがふるまわれ，メンバーたちは，隣り合わせた人たちとそれぞれ会話を弾ませていた。

だが，この晩餐の圧巻は，なんといっても「ＯＵＲ・ＢＯＳＳ・中塚」さんのアメリカ国歌熱唱だったろう。なぜなら，彼の気持ちに人々が感動して声を合わせ，いつのまにか大合唱となったからだ。そのコーラスは亜熱帯の木々をこえて舞い上がり，その夜のフロリダの空を美しく満たしたはずである。コルクの割れ目からワインがいつのまにか浸透していくように，壁の隙間を乗り越えて心に届く力を，歌は持っているのかもしれない。我々にとってもこの瞬間は，今回の訪問の中でも忘れられない思い出のひとつとなった。

**9月28日**

**9:00　ミラーレイク図書館見学**

公式団とともに訪れたその日最初の施設は，ミラーレイク図書館で，メインライブラリーの他に五つある市の図書館のひとつである。とても重厚な建築物で石の階段を上がったホールは邸宅のエントランスルームのような雰囲気さえある。コーディネーターのメアリー・ブラウンさんが「1915年建築されたカーネギーライブラリーのひとつです。近年建てまわしされましたが，大方は当時のままで，地元のつながりを大切にしている，親しみやすい図書館です」と説明くださった。姉妹都市である高松の展示コーナーもあり，ちょうちんがつってあって，奉公さんの人形や扇子，絵葉書などがガラスケースに飾られていた。増田市長にフィッシャー市長サインのはいった，アメリカンライブラリーの歴史が書かれた本が贈られ，我々にも本のしおりがプレゼントされた。

チルドレンライブラリーの部屋では，毎週水曜日にスタッフやボランティアの人たちによって，紙芝居やパペットショー，ストーリーテリングなどが開かれるそうだ。増田市長ももと図書館長でいられたので，ことさら興味深げに，パソコンルームや蔵書の数々を眺めておられた。

**9:50　パームショアー・リタイアメントセンター見学**

公式団と別れて市民団が訪れたところは，いわゆる私立の老人ホームだった。だが，そこはメンバーが抱いていたイメージとはかなり違った「つどいの場」とも言うべき，暖かい空間で，ここに滞在中，我々は本当にここが老人ホームなのかと自問するほどだった。食事室は，ホテルのレストランのように完璧にセッティングされた優雅な「ダイニングルーム」だったし，個室の部屋の入り口は，ドライフラワーや椅子，かわいいオーナメントなどでそれぞれ自由に飾り付けられており，生活を楽しんでいる様子がうかがえる。特に見せていただいた室内も，ソファやベッドなどを置いても十分な広さの上に明るい色調で，希望があれば自宅の家具を持ちこんでもいいということだ。さらに住人の方に聞けば，比較的元気なお年寄りたちが，介護を必要とするお年寄りたちをボランティアでヘルプするという，相互扶助の実施が行われているのだ。その人にとってそれは今の生きがいとなっていて，奥さんと二人でここを選んだことが，今までの人生における

多くの引越しの中でベストチョイスだと語ってくれた。「私たちは少しずつ寄付金を出し合って，若い学生の援助もしているのですよ」と教えてくれたおじいちゃんの目の中には，確かにまだ生き生きとした輝きがあった。

アメリカのすべての老人ホームがこんなわけではあるまいが，確かにここに笑顔で過ごす老人たちの姿があったのを銘記したい。そして，彼らはそこでなお，ボランティアや寄付，小さな売店などを経営することで社会に貢献していると意識して前向きに生きている。

ラウンジでドーナツを食べながら，みんなでメンバーの一人丸浦先生のピアノを聞いた。こんなときにこんなことができてしまう先生ってほんとに素敵だ。すべてのアイテムを紫でキメている独自のおしゃれ感覚は世界に通用したと思うし。（彼女のニックネームが「パープル・丸浦」となったことはご想像どおりである。）折り紙で鶴を折ったり，互いのことを紹介しあったりしているうちに，時間はあっという間に経ってしまっていた。本当に楽しかったし，ここに来られてよかった！メンバーの誰もがこの訪問に大きな感銘を受け，もっと多くの人たちに訪れてほしいと思ったに違いない。

**11:30　ピア見学**

見た瞬間「あ，どたま獅子」だと思ったのは，さすが讃岐の人間である。その名のとおり埠頭の先端にあり，上にいくほど広がったユニークな構造物で，美術館に水族館，レストランやショッピングのできるかわいい店などが詰め込まれた観光スポットだ。バスも出ているが，メンバーの大半はそこまで歩いてフロリダの海風やお茶目なかもめの姿を楽しんだ。メンバーの最年少の川田さんは，気に入った景色の写真をもくもく撮っている。彼女の写真には芸術的な独自のセンスがあり，それは彼女のしっかりしたものの考え方にも現れていた。（オピニオン・川田と命名されたほどだ。）メンバーは写真を撮ったりお土産物屋を覗いたりして思い思いに楽しんだ。

12:15　**レッド・ウッズで昼食**

そこは昨夜のガーデンパーティのホストだったエマニュエルさんが経営するレストランで，公式団とともに昼食会に参加した。コの字型に配置されたテーブルに思い思いに座って，またまたすばらしいコース料理を堪能した。増田市長も楽しんでいらっしゃるご様子で，エマニュエルさんのご好意に感謝の言葉を述べられたし，フィッシャー市長も今夜の大リーグ観戦にはカジュアルルックでおいでください，と笑顔いっぱいだ。もうそのころにはお互いずいぶん打ち解けて，そこここで楽しい会話の花が咲いている。しかも料理が特記するほどにおいしかった！奥に作られたすしバーの方でも，さぞかしの味が供されるのであろう。

14:40　**ファイン・アート美術館見学**

セント・ピーターズバーグ市にあるもうひとつの著名な美術館が，ここ，ミュージアム･オブ・ファイン・アートだ。ルノアール，セザンヌをはじめとする印象派の名画や，アジアやアフリカ，ネイティブアメリカンのコレクションなど，4000点を超える美術館の所蔵を誇っており，優雅で堂々とした白亜の建築物が我々を迎えてくれた。

エマニュエルさんの奥さんであるジェニファーさんが案内してくれて，「このクラシカルな建築は，ピアをデザインした人の手によるものです。1965年に建造され，ニューヨークの著名な美術館のスタイルを見本にしました。」と説明くださった。特にアジアセクションでは，日本の版画の貴重な複製品が一冊の本となって展示されており，自国の文化が大切に保存されていることに，メンバーは感銘を受ける。感銘を受けるといえば，メンバーの一人，葛原さんが通訳を買って出てくれて，ジェニファーさんの難解な美術用語をこともなげに訳してくれたのには驚いた。もちろん彼女は「ミュージアム･葛原」とネイミングされ，その卓越した英語力に一同感服した次第である。なるほど，ウィッチ・吉岡局長はいいかげんな人選はしていなかった！

ギリシャ・ローマセクションの宝石に目を奪われたり，中庭で毎週火曜日に催される優雅なティーパーティに思いを寄せたりしながら，我々はこのハイレベルな美術館のを見学した。隣接するミュージアムショップにも，ユニークなお土産がいっぱいで，メンバーはふるさとの知り合いの顔を浮かべながら，いろいろと品物を選んでいた。

17:45　高松市答礼宴

（トロピカーナ球場レストランにて大リーグ観戦）

いよいよ最後の公式行事である。しかも球場レストランなどという特別席で大リーグ戦の観戦なのだ。ホストファミリーの車からそこに向かえば，パームツリーに囲まれたコロセウムのような建物が眼前に迫ってくる。「私たちの車は特別駐車場に止められるのよ」とシグニーさんがいう。「あなたたちは特別なのですから」と。ＶＩＰになったら常にこういう待遇を受けるのだろうかと，しばし有名人の気分に浸る。まったくなってみたいものだ！

持ち上がって広がる円形の観覧席の最上段に，その特別席はあった。クロスのかかった四角いテーブルがゆったりと配置され，それぞれ飲み物を持ってファミリーとともに席についた。記念写真のあと，増田市長があいさつをされて，フィッシャー市長がお答えになる。何より感動的だったのは，地元のご夫妻による和太鼓の演奏で，その様子は球場の大型スクリーンに映し出された。その力強い音は，自国の文化への誇りとあいまって，一同の胸まで強く打ったはずだ。アメリカ国歌も感情たっぷりに歌われたし，増田市長の始球式もかっこよく行われた。まったく夢のような体験で，感動のしっぱなしだったが，姉妹都市セント・ピーターズバーグの施設のすばらしさ，豊かさを改めて感じたのはいうまでもない。地元のチーム，タンパベイ・デビルレイズは残念ながら負けてしまったけれど，テーブルのあちこちで最後の交流が和やかに行われ，両市の人たちの胸中は，やり終えたことの満足感で満たされていたことだろう。市長や市議会のメンバーの人たちと記念撮影して写真を送ることを約束したり，Ｅメールアドレスを手帳に書きとめたりと，みんなの思いは今から先に向かっている。そう，交流は始まったばかりなのだ。

**9月29日**

**9:00　出発**

まさにフロリダの晴れのこの日の天気に似て，市庁舎前に集まったセンピーの人たちも，我々も笑顔いっぱいのお別れ式だ。なにしろ今日のさようならは，来年以降もっと広がっていくであろう二都市の関係の，小さな発端に過ぎないのだから。でも，市民の一人としてその一部になれたことにメンバーたちはちょっとした誇りを感じている。

石段で写真を撮りあったり，握手を交わしたり，バスの出発するぎりぎりまで，ファミリーたちと最後のひと時を過ごした。そしていよいよ荷物を積み込み，バスに乗る。「シー・ユー・アゲイン」がみんなの口から自然に出てくる。動き出したバスの窓からみるみるうちに小さくなっていく，ファミリーたちの顔と市庁舎の姿。ここでついにうるっときてしまったかな。ありがとう皆さん，こんな英語に耐えてくれて。貴重な三日間を我々に使ってくれて。海の向こうの高松に興味を持ってくれて。なにより，こんな風に人と人の出会いがあったことに感激しながら，我々はいつまでも手を振っていた。

**11:30　レストランで昼食**

バスの中で急に疲れの出始めたメンバーたちである。うとうとしたりあくびをかみ殺したり，首筋をもんでみたりと，これからあのディズニーワールドに向かう車中とは思えないノリの悪さである。一仕事終えたあとの脱力感だろうか。それを察したウィッチ・吉岡局長，体操をしようと言い出した。我々のメンバーにはエアロビクスの著名なインストラクター，塩津さんがいるのである。まだオープンしていないレストランの玄関前で体操を始めだした妙な日本人の集団を，お店の人がどう受け取ったかは知らないが，確かにこの体操は心身のリフレッシュにつながった！「エクササイズ･塩津」に感謝である。お店の人が五分前に入り口のドアを開けた。うまい具合におなかもすいて，大きなかにの足にメンバーは舌鼓を打った。

**13:00　ディズニーワールド見学**

森と湖の中に作られた世界の「遊び場」は，東京ディズニーランドの130倍の面積を誇る広大なアミューズメント･パラダイスだ。豪華なオフィシャルホテル，縦横に走るモノレール，果てしなく広がる駐

車場，もう，すべてが桁外れである。いくつもある遊びモードの中からマジックキングダムに入ることに決める。中では自由行動で，それぞれパレードを楽しんだり，お土産を買ったり，絶叫マシーンで大騒ぎをしたりして楽しいひと時を過ごした。中でも「スプラッシュマウンテン」は特筆したいほどの盛り上がりようだった。ウィッチ・吉岡局長とミュージアム・葛原は，もう一度乗りたいと思っただろう。ここまで満喫してくれる人たちがいて，ディズニーもさぞ作ったかいがあったというものだ。

**18:00　和食レストランにて夕食**

久しぶりの和食である。てんぷらにお刺身と日本酒。懐かしい日本の味だ。もうすっかり気心が知れたメンバーは，箸を動かす手を休めることなく，突っ込んだ論議も忘れない。もう少しセンピーにいて交流したかったという意見が多く，せっかくの姉妹都市訪問がわずか三日間足らずだったことが残念のようだ。もちろん，ディズニーワールドは楽しかったし，これから訪れるグランドキャニオンは魅力的なのだけれど…。皆まじめなのである。「日本食もおいしいけれど，ここはアメリカなんだから，あの固いステーキだっていいわよねえ」とは，マム・渡邊（その名のとおり，彼女にはふわっと優しい雰囲気が漂っている）。確かに。たった八日間の滞在なのだから，食事は毎日薄めのコーヒーとドーナッツでもかまわなかったかもしれない。だって日本じゃないんだから。とは言いつつも，何一つ残さず食べきったメンバーではあった。

## 9月30日

**午前中，オーランド市内観光**

カリブ・ロイヤル・リゾート，というのが宿泊したホテルの名前である。中庭にある温水プールを中心にして客室が何棟も立つビッグなリゾートホテルだ。バイキング形式の朝食のあと，我々一行はバスで市内観光に向かった。広い平原の中，目に入る建物はほとんどが観光客用のホテルである。建設中の建物も多く，世界の観光地はまだまだ膨張するのだろう。市街地に入り，池の見渡せる公園でエクササイズした後，古い街並みを見学した。レースのデザインのような美しい柵が，二階建ての商店を飾り，重厚な木製のドアに「CLOSED」の看板がぶら下がっていたりして，思いっきりレトロな雰囲気である。ジョン・ウエインの写真が飾られたカウボーイ物専門の店や，格式ありそうな宝石店などとても興味深く，時間があればもっと見たかった。そこでアメリカの貨物列車が通り過ぎるのも見学できた。いったい何両連なっていたのかは知らないが，通り過ぎてくれるのに数分かかったのにはびっくりした。このあと，免税店に行って買い物をし，中華料理店で昼食のあと，ラスベガスに行くために，我々は飛行場に向かった。

## 20:50 ラスベガス着

この飛行機の旅は思い出すのも恐ろしいほど疲れてしまった。三角形の一辺をいくために残りの二辺を回ったという気がしないでもない。(個人的には，ぜひとも旅行会社に理由が聞いてみたい) ともかくグランドキャニオンが待ってるんだ，と言い聞かせながら，我々は我慢の子になったのだが，飛行機の窓からラスベガスの光が見えたのには感動した。砂漠の闇の中，そこだけがぼおっと浮かび上がっている。近づくと，まさに光の洪水で，なんとも美しく，幻想的だった。「砂漠の不夜城」とはよくいったものである。でも，まあなんて，アメリカって広いんだろう。ひとつの国なのに時差があり，移動に飛行機で一日かかってしまう。摩天楼もあれば，砂漠もあり，遊園地だけの町もあれば森林地帯も岩石地帯も，全部そろっていてすべてが思いきりでかい…と，思わず隣に座る大きなおじさんを見てしまう。腕だって，筆者の足より太いのだ。彼は隣の迷惑にならないように，その腕を組んで胸まで持ち上げ，そのままの姿勢で四時間半耐え抜いた。飛行機に乗るときだけは大きくないほうが得かもしれない。

ラスベガスの空港で，待っていたバスに乗り込むとき，何台ものリムジンがタクシー代わりに止まっているのを目にする。ここからホテルへリッチな人たちを運ぶのである。乗り込む人たちはきっと普段からトランスポーテーションは自家用リムジンなのだろう。多分カジノで使うお金もケタ違いで，もしかしたらすっちゃって，次の日からボーイをやらなきゃならないかもしれないけど，たいていの場合，たくさん賭ければ賭けるほど損をしなくなるというあの数学の法則どおり，もっとお金持ちになって帰るんだろうか。車窓には昼間のように明るいラスベガスの町並みが映し出され，ピラミッドだとか，摩天楼だとか，エッフェル塔だとか，信じられない建築物がド迫力で我々を迎えてくれる。数千人泊まれるという，そんな巨大なホテル群が満艦飾で，夜空を黄金色に染めているのだ。ふさがりかけていたまぶたはまたもしっかり見開かれて，もしかしたら口までも開けて，この光景を見入っていたメンバーもいたに違いない。ほんとうに驚きの世界である。

今日の宿泊地は「モンテカルロ」。これまた白亜にそびえる見事なホテルで，二階部分に巨大カジノ，三階は世界の一流ショーが開かれるステージを有している。美しいカップルが広いロビーを気楽そうに歩いているかと思えば，あちらのソファでは，年配のグループが談笑している。もう，完全に圧倒されながら，とりあえず部屋に荷物を運び込むメンバーたちだった。

10月1日

**グランドキャニオン見学**

セスナの窓からネバダの荒野が広がっている。我々は今，ラスベガスからグランドキャニオンに空をまたいで向かっているのだ。アメリカ西南部の大河，コロラド川が数十億年かけて創造したこの大峡谷は世界の観光地というだけでもなく，地球の歴史そのものであり，我々すべての遺産でもある。ヘッドホーンから日本語の説明が流れ，各自思い思いに景色が楽しめるのだが，メンバーの目は眼下の壮大な景色の展開にくぎ付けである。想像した通り，いやそれ以上にネバダの砂漠は果てしなく，次第に全景をあらわにし始めたグランドキャニオンの迫力が圧倒的だったからだ。はるか下を細い糸のように一本の道が伸びている。ラスベガスからあの国道を利用していくこともできるのだ。ただし，砂漠の中をひたすら数時間，高速運転で走りつづければの話である。筆者は以前そうやって行って，不毛の大地の偉大さと恐怖を同時体験した。地球相手に個人のできることなど何もないと感じさせられた。

前方で砂漠にぽっかりと亀裂が入り，それが褐色のさまざまなバリエーションの層となって下へ横へと膨張している。峡谷が始まったのだ。幅数十キロ，長さ数百キロという桁外れのスケールで，この大自然は今でも息づいて，谷を掘り下げ，尾根を持ち上げて，その偉大さを誇示しているかのようである。確かにセスナからの光景は，生涯の思い出となった。

グランドキャニオンの飛行場についた後，バスに乗り換え，同乗していた日本人ガイドの女性とともに国立公園に入っていく。林を抜け，何分か走った後，バスはいよいよキャニオンの「火口」にたどり着いた。背の低い柵からこわごわ眺めると，裂け目は足元から垂直に落ち込んでいて，高所恐怖症でなくても立ち眩みを起こしそうだ。それでも目を凝らせば，コロラド川がまるで泥の色をした細い蛇のようにうねうねと伸びていて，そこを観光用のボートが川下りをしているのが伺える。乗客たちの目にする地層は，二十億年前のものだとか。彼方にかすむ峡谷の向こう岸まで数十キロあるというから，さながら宇宙規模の落雷が地表を切り刻んだ感がある。裂目の内部には無数の突起が天に向かって突き出しており，不毛の大地そのものなのに，住んでいる人がいるというのには実際びっくりした。わずかばかりの木々に囲まれた平坦な場所に，ナバホ族の居留地があるの

だそうだ。そのような壮大な景色の一部となって暮らしていくのはどんな感じだろう。日の出，日の入り，星や月の動きが全周スクリーン状に繰り広げられ，峡谷の陰影を日々眺めているうちに，みんなして天文学者か哲学者になってしまうのではないだろうか。アメリカインディアンたちの不遇の歴史を思う時，決して彼らのたどった道が平坦ではなかったことは自明だけれど，あの場所をすみかとすることは多分，大邸宅に住む以上の魅力があるに違いない。

三個所の観光スポットを回った後，メンバーたちはレストランでバイキングの昼食をすませ，またセスナに乗って，ラスベガスへと戻った。二人の操縦士のうち一人は大変美しい女性で，あまりのかっこよさに一緒に写真を撮らせていただいたのもいい想い出である。体調を崩した佐藤さんと丸浦さんが参加できなかったのは残念だったけれど，キャニオン見学はセンピー訪問より後の行程で，最高のハイライトとなってくれた。

### 17:00　オールスター・カフェで最後の夕食

旅行もいよいよ飛行機での帰路を残すばかりとなった最後の夜である。買物や荷造りなど，思い思いに夕方までの時間を過ごしたメンバーは，各界のスターが共同で作ったという有名なレストランに集合した。みんなおしゃれをして集まったのだが，なかでも光っていたのが，持ち合わせのショールやドレスで，インドの貴婦人のように決めてきたメンバーの一人，藤本さんだ。いつもは適切かつ深い読みの意見で周囲を圧倒する見識の持ち主だが，この独特のおしゃれ感覚が，また彼女の雰囲気にぴったりで「ヒンディー・藤本」とネイミングされた。十年来，アジアからのステイを受け入れている経験豊かな彼女も，この訪問でいろいろ考えさせられたとのこと。なるほど，この旅は，誰にとっても意味あるものだったのだ。

「お疲れさまでした」とウィッチ・吉岡局長。「市民レベルの交流という最初の一歩が，成功裏に終わったことはほんとにうれしいです。いろいろ問題もあったと思いますが，なによりこうして元気に今日が迎えられてよかった」と，肩の荷が半分ぐらい下りた様子。笑顔の裏にさぞ苦労も多かっただろう。いつもは手厳しい「マイウェイ・佐藤」さんも，局長の労を報いて乾杯をする。それぞれの胸の中には，この数日間の出来事が次々と去来してくる。普段の半年分ぐらいの経験をわずか数日ですませたような，ぎっしりつまった八日間だった。センピーでの人々のホスピタリティに感激し，老人ホームの愛ある実践に考えさせられ，美術館や球場など，施設の充実に驚嘆させられた後，大急ぎでまわったアメリカの

一部が，また大きな感動となってメンバーの胸をいっぱいにしているのである。食事の度ごとに討論したこと，互いにぶつかり合ったことまでも，今となっては懐かしい。もう，こうした経験はお互いできないだろう。ロックの音楽とウエイターや客の往来でにぎやかな店内で，私たちのテーブルには，ちょっぴりしんみりとしたムードが漂っていた。

**10月2〜3日**

**ラスベガス空港 〜 L．A空港 〜 関空**

最後の長い空の旅である。旅の疲れも手伝って，メンバーたちは互いに言葉少な。運ばれてくる食事にも手をつけないで眠りこけている人もいる（ロス・ビデオ・岩田と，オキャマ・秋山だけは記録係という立場上，その休息も許されなかったが）。我が家まで後すこし，今はただ，真っ直ぐ眠れる布団が恋しい。

**10月3日**

**20:00　高松空港着**

到着ロビーに家族の顔が見える。思わず顔がほころんでくる。何より感謝しなければいけない人たちが，手を振って我々を出迎えてくれている。荷物の受け取りもそこそこにメンバーたちはそれぞれの家族のもとに駆け寄った。ありがとう，こんなに長い間，バックアップしてくれて。市の関係者の人たちもわざわざ御出でくださり，ウィッチ・吉岡局長がお礼の言葉を述べられた。記念撮影を終え，互いに別れの言葉を掛け合って再会を約束し，それぞれの車に乗り込んだ。「ね，どうだった？」とは，子供たちの第一声。

「うん，楽しかったよ。とっても，とってもすばらしかった」

# 研　修　報　告

# セント・ピーターズバーグ親善使節団に参加して

中　塚　貞　雄　(団長)

青い海，白い砂浜，白いボートの群れ，照りつける太陽。プールのある豊かな家々，緑したたる町並み，温暖な気候。陳腐な表現だが，どれもそのとおりであり，フロリダのセント・ピーターズバーグは地上の楽園である。

中国ではアメリカのことを「美国」と言うそうだがまことにその名のとおりである。人々を取り巻くそれらの自然環境や充実した人為的な環境はどのようにして形づくられてきたものであろうか，興味のそそられるところである。

昨年セ市の代表団が高松市を訪れたとき，私はそのうちの一人エマニュエル氏をわが家に迎え入れた。栗林公園，屋島等いろいろな景勝地へ一緒に行ったものだが，当地へ来て最初に驚いたのはロードサイドや庭の芝生が綺麗に刈り込まれてあり，街路樹も同じく綺麗に整備されていたことである。もちろんゴミも落ちていない。こちらでは街中すべてが公園であり，高松のようにみどころを探す必要はなかったのである。

このことは私には大変象徴的に感じられた。というのは，アメリカは自分が正しいと思ったことであれば，国内外を問わず，ベトナムであれ，イラクであれ，古くは日本であれ，容赦なく出掛けて行って自分の意見を押しつけ，実力行使する国だと思っているからである(そう考えているのは私だけではあるまい)。つまり，良いと思ったことはあれこれ迷わずにすぐ実行する，「実行力」という素晴らしい一面をもっているのである。この点は我々日本人にはない特質であり，大いに見習うべきであろう。

セ市訪問後立ち寄ったディズニーワールドの完成され尽くしたハードとソフトもまた同じ。人々を童心に返らせて楽しませるというコンセプトに基づいて，盛り沢山の施設とエンターテイメントが生後三十年とふた昔の私の心さえも童心に返らせてくれたのだ。

日本はアメリカに追いつき，追い越していると，ともすれば錯覚しがちだが，残念ながらそれはごく一部の科学技術や芸術・文化等，限られた分野だけの話であり，大部分にアメリカに比肩すべきところはなく，総合的な(人間的な)面でやはり三十年先を歩いているというのが私の今回の旅の感想である。

子供の頃から姉妹都市としてその名前だけは十分に慣れ親しんできた，セントピーターズバーグ市。はるか遠い，フロリダ半島の夢の街。メキシコ湾に面したフラットで広大な一大リゾート地であり，豊かで温暖な土地に住む住民はまさに人生を楽しんでいる様が十分に伺える。

こんな素晴らしい街と四十年も姉妹年縁組をしてきたのかと，高松の汚れた街並みを思い出して，今さらながら少々の恥ずかしさとともに，一市民としての誇りにも思う次第である。この素晴らしい体験を，高松市の縁の下の力持ちとして，残された人生の中で十分に活かしたいと思っている。

# セント・ピーターズバーグ市を訪問して

秋　山　博　子

このレポートを書くにあたって，まずこのような貴重な経験をさせて頂けたことに感謝したい。今までの私にとって，セント・ピーターズバーグは，図書館や国際交流協会の展示物に過ぎず，何の関係もない，よその国のきれいな町でしかなかった。市のレベルで外国との窓口を持っているというポーズに過ぎないという，ごく否定的な感覚だったのだ。だが，こうして訪問させて頂き，ホームステイを経験して，姉妹都市という結びつきは，取り組みかたひとつで，どんな風にでも発展させられ，お互いが活性剤となりうるのだと実感した。

たとえば，セント・ピーターズバーグの二つの美術館。一つはダリの作品を世界一という規模で所有しているし，もう一方は，ルノアールなどの印象派の作品をはじめ，アフリカ，アジア，中南米，ネイティブ・アメリカンのアートも数多くコレクトしたファイン・アート美術館。どちらも，これが高松市と同じくらいの街がもつ文化的視点，市民の文化水準の高さを雄弁に語ってくれるだけでなく，同市が，対外に向けて誇りを持ち，人々を引き付け，さらに多くを吸収する資本になってくれていると思う。芸術的財産は，決して最後の予算から計上されるものではなく，それの持つ付加的な力もあわせて積極的に取り入れることも，香川県の中心であり，中核市を謳う高松市のあり方への提言である。

また，大リーグの試合の行われたトロピカーナ球場や老後を積極的に生きられるよう工夫された老人ホーム，地位に根づいた図書館や大学のキャンパスなど，市民が自由に享受できるものに優れた機能性と豊かさを感じた。市庁舎などはそれに比べれば驚くほど質素で，経営の視点の高さを感じたものだ。

その上で，我々は市民として，市政をバックアップするにはどうしたらいいのだろうと考えさせられた。高松市の出してくる提言を，我々は常に意識してチェックしているだろうか。これ，という意見が出た場合，積極的に応援し，逆の場合にブーイングの声を挙げているだろうか。何もしないで文句だけ影で言っているのがせいぜいではなかっただろうか。

より住みやすく，豊かで，活性化した街を創造するには，為政者と市民の両方の力が必要で，とちらか一方では見識の低い，片寄った街作りに終わってしまう。それは双方にとって悲しいことだ。なぜなら，高松市民という立場はみんな一緒なのだから。

私はこの機会を通じて，自分が高松市民の一人なのだと強く意識させられた。高松から来たのだということを常に意識したことは初めてだったし，それが市民レベルだから余計強烈だったのかもしれない。

どうか，これからもこのような機会を持ちつづけ，一人でも多くの市民を外へと送り出してほしい。彼らはもっと多くの，もっと別のものを見てくるだろうし，高松市民という意識，高松市の豊かな街作りに積極的に参加するという姿勢への一助になるに違いない。

# サンシャインシティ　セント・ピーターズバーグ市国際交流にて学んだこと

## －SILENT GENTLEMAN－

岩　田　武　夫

紺碧の空と輝く太陽。まさしくサンシャインシティの名にふさわしいその街セント・ピーターズバーグ市に私たちは立っていた。そして，夢にまでみたカニーとの再会である。

昨年５月にセント・ピーターズバーグのフィッシャー市長一行を高松市に迎えた折，市議会議員のカニー・コーンさんに我が家にホームステイしてもらったことが今回の訪問のきっかけになっている。その時楽しい思い出を刻んだカニーの所へ今度は私がホームステイできるとはこんなに嬉しいことはない。

タンパ空港に夜遅く到着した我々を出迎えてくれたカニーは相変わらず優しい微笑みで私たちを包んでくれた。その横には，夫のジョンがいる。写真でみたジョンよりもがっしりした体格で，世界中のダムを手掛けた電気エンジニアであり，職人気質の穏やかな人柄だ。静かで堂々とした威丈夫という感がある。

セント・ピーターズバーグ市は，アメリカ中の人が訪れるリゾート地であるだけにそのベイエリアの風光明媚なことといったら，言葉もないくらいである。特に1933年式の複翼機に乗り上空から見たこの街の美しさは，「こんな街とよくもまあ，40年間も姉妹都市であってくれた。」と思わせるくらいに素晴らしかった。その美しい街の印象にも増して３日間のセント・ピーターズバーグ市滞在でもっとも心に残ったのは，カニーの夫のジョンのことであった。

私は彼を「SILENT GENTLEMAN !」と呼びたい。カニーは高校の教師をしていた経験から，副市長として教育政策を掲げ，いろいろなプロジェクトを実現してきた。その上，昨年はフロリダ州の上院議員に立候補するほどのアクティブな女性である。その人間性は，誠実感と行動力に溢れている。このカニーの活躍を，巨大なタンカーの如くゆったりとそして穏やかな眼差しで見つめ続けているのが夫のジョンであった。彼は少し耳が悪く聞こえにくい。その為，言葉少なき静かな人なのである。77歳になり仕事をリタイヤしているジョンは，毎朝私たちの朝食の為にコロンビア産の強いコーヒーを入れてくれた。目の覚めるようなストロングコーヒーである。それでいて強すぎない。彼がブラジルのダムを建設する為に向こうに滞在していた時からずっとこれを愛飲しているという。まるで彼の人柄そのものの様なコーヒーだ。同じくここでホームステイしていた塩津さんも気に入っていた。彼のこうした朝の世話から公式行事に向かう私たちを見送ってくれる穏やかな眼差し，忙しい日程の公式見学を終え夜遅く帰ってくる私たちを，新しいタオルと程よく冷やした部屋で迎えてくれるさりげない姿，その何気ない立ち振る舞いの中には静かな

ジェントルマンとしての優しさが溢れていた。この夫のもとでこそカニーはカニーらしく振る舞えるし活躍できる，と思った。ホームステイ中，私の借りていたジョンの部屋の壁にはカニーの肖像画が静かに飾られ，彼の机の上の１枚の写真楯からはきらきらと輝くカニーが微笑みかけていた。

KNIGHTでありたい。そして言葉は少なくとも静かなるGENTLEMANでありたい。GENTLEMANであるためにはどれほどの強さを必要とするか。どれほどの深さを必要とするか。どれほどの愛を必要とするか。その魂を私は鍛えてゆきたいと思った。ジョンを見てそう思った。今回の旅行の後半で見たあのグランドキャニオンの大自然に挑む人々の姿，また何もない荒野の砂漠の中に夢の歓楽街・ラスベガスを創ってしまうその粋で明るい開拓精神の根っこにアメリカ男性のGENTLEMANとしての強さを見る思いがした。

別れの朝，市役所前で私たちのバスを見送るジョンの姿は相変わらず，堂々とした中にも静かな優しい眼差しをこちらに向け微笑んでいた。塩津さんがバスの中から「ジョン！ジョン！…」と叫ぶ声も聞こえぬ様子でこちらを見つめ続けているジョンの姿がとても哀しく印象的だった。

—— SILENT GENTLEMAN ——　　JOHN. KONE。

# セント・ピーターズバーグ訪問を経て

川　田　有　花

今回のこの訪問は，私にとってとても勉強になりました。姉妹都市として名前も知っていたし，学生を受け入れたこともありましたが，その都市を見て，印象がやはり変わりました。想像していた以上に素晴らしい場所で，同じ位素晴らしい人が住んでいました。

言葉の通じない所で３日間暮らすというのは思うよりも少し苦しかったけれど，それ以上に得たものが沢山ありました。

特に印象深い思い出は，パーム・ショアーズという老人ホームでした。建物の色づかいやインテリア，飾ってある絵や置物，すべてがそこに人が「住んで」いることを表していました。そこにいる人は，働いている人も含めて皆さんが生き生きしていて，幸せそうでした。日本では年齢問わずあんな表情はそう見られないと思います。案内をしてくれた方もとてもにこやかで，建物から出るのが辛かったです。

日本でも，中学の時にボランティアで老人ホームを訪問したことがありましたが，パーム・ショアーズとはほぼ正反対だったと思います。老人ホームに対するイメージというのも，日本とアメリカではずい分違うのではないかと少し考えさせられました。

合理化というのは大事です。けれどもその中に，ゆとりや楽しみを取り入れることを，日本もそろそろ考え始めていい頃だと思いました。

アメリカやヨーロッパにホームステイをした後は，日本の人はやはりそこに住みたい，とか，うらやましい，ということを言います。私も実際に３日間だけでもそこに居て，その気持ちが少し分かったと思います。けれども，そこで終わらせてしまえばこの場所は良くならないことも知っています。隣の芝生が青いからといって眺めているだけでは自分の芝生は枯れる一方でしょう。自分で世話をして，隣と同じ位青くするのもいいでしょう。けれど，一番大事なのは自分の家を，芝生を，好きになることです。大切に思うことです。自分の国を卑下するのではなく，他の国を見て，いい所も悪い所も見て，それを自分の国に生かせる，そういう風に全ての人ができたなら，その時に「国」が「世界」に変わるのだと思います。

今回の訪問では本当に，いろいろなことを考えました。次はもっともっとたくさんのことを考えるでしょう。そして，そのために国際交流はあるのだと思います。これからも，楽しく，真剣に，こういう「きっかけ作り」に参加したいと思っています。

# セント・ピーターズバーグ市を訪れて

葛　原　由　起

今回の旅でいちばん嬉しかったのは，セント・ピーターズバーグの皆様の暖かいご歓迎でした。フィッシャー市長はじめ関係者の方々のお人柄は，率直で正直で親切で善意に溢れて，古き良きアメリカ人の美徳を体現なさっているようで，とても心に響くものでした。

とりわけ，ホームステイをご提供くださったキャシー先生や車によく乗せていただいたビッキー先生は，偶然，５年前，当時一高に勤めていた私の英語の授業を見学に来られた方々で，不思議なご縁を感じました。ビッキー先生は，エッカード大学から高松に毎年派遣されるアメリカ人（現在も市民学校で私が一緒に教えている）講師の選考委員もしていらっしゃるということで，何人もの共通の知人の名があがり，ずっと前からの友人のようで，本当に人の縁の不思議さを思いました。

キャシー先生のお宅では，先生のお留守にお母様から電話があり，慌てたお母様が「キャシーに娘から電話だったと言っておいてね」とおっしゃる一幕もあり，「ああ間違えたわ，母親からの電話だって言ってね」と訂正なさって，２人で大笑いでした。こんなふうに地元の方の日常生活に入らせていただけたことが（これはパーム・ショアーズ老人施設での交流もエマニュエル邸でのガーデンパーティもですが）特に楽しい経験になりました。

また，州立大学図書館で女性スタッフと産休・育休やいわゆるグラスシーリングなどについてお話する機会があったのも，ファインアート美術館で大好きな美術館の解説の通訳のお手伝いをさせていただけたのも，他にもたくさんあって書けないのが残念ですが，みんな素晴らしい勉強であり経験でした。

高松市長様，議長様，藤本室長をはじめ市の方々，そして誰よりも吉岡局長，そしてそして団員の皆様には本当にお世話になりました。皆々様のご親切とお心遣いのおかげで，この旅は一生心に強く温かく残る思い出になりました。心より感謝申し上げます。

# 高松市国際交流市民親善大使帰国報告

佐　藤　義　則

この度は，第一回高松市民親善大使にご任命いただきまして誠に光栄に思います。

増田高松市長，諏訪市議会議長とご同行できましたことは大変意義のあることでした。また，深夜の到着にもかかわらずお出向かいいただきましたセント・ピーターズバーグ市のフィッシャー市長夫妻，ホームステイ先で常にあたたかいおもてなしをいただきましたエマニュエル氏方々に深く感謝申し上げます。

私たちの先人がフロリダのセント・ピーターズバーグ市と姉妹都市縁組をしていただいてから40年，セント・ピーターズバーグ市には高松市の40年の歴史を偲ぶ品々が収められ非常に懐かしく感慨もひとしおでした。

ここで，今回の訪問におきましていろいろな公的機関を視察させていただきました中でも，最も感銘を受けました老人ホームについてご報告させていただきたいと思います。セント・ピーターズバーグ市の老人ホームは，日本の老人ホームの印象とはかけ離れたものでした。グリーンに囲まれて広々としたスペースにゆったりと建っている老人ホームは，中に入った瞬間，これはホテルではないかと錯覚したほど美しく，中の老人の方たちはどの方を見てもとても生き生きとし，本当に人生をエンジョイしているというのが実感として伝わってきました。一人ひとりが若者と同じ意識を持ち夢のある生活を楽しんでいるのです。ダイニングルームにはカラフルな絵画が掛けられ，談話室にはピアノが置かれ，片側にはクッキーやお茶が用意されていて，いつ誰が来ても楽しむことの出来る空間があります。ここに集まってはピアノを弾いたり，絵を描いたり，手芸をしたりして楽しんでいるのです。これらの作品は外で売り，その売上でまた材料を買うとのことです。この老人ホームは公的施設であり，入居時の約1000万円を支払うと（10年という契約ですが）死ぬまで面倒を見てもらえます。ただし10年以内に亡くなった場合であっても払い戻しはありません。また，アルツハイマーに関しては１．正常　２．軽度　３．重度と３段階に区分されており２．と判断された場合は腕に発信機が付けられ所在地の確認が出来るようになっています。３．の場合は病院に入院させられる様になっていますので家族の方々にとっても非常に安心出来るものです。日本でも今後老人人口が急増する中，幸せな老後を送ることは，すべての人々の望みです。私たち一人ひとりが人生に目標を持ちいつまでも夢を持ち続けることこそが最も大切なことですが，老人ホームをハード面で単なる箱ものとして捕らえるのではなく，人生の一つの豊かなステージを送る場としてのソフト面から捕らえ，そこから設計をも考えていかなければならないのではないかと考えさせられました。

私自身も住宅を作っていますが将来的には老人ホームを作り，一人でも多くの方にこのような夢のある老後をご提供できたらどんなに素晴らしいことかと強く感じました。

今回，第一回目の親善大使としてこれ以外にも素晴らしい経験をさせていただきましたが，今後のより効率的かつ実りの多い成果を期待して，２つほどご提案させていただきたく思います。まず１つは，ホームステイについてのご提案です。ホームステイは今回１家族に２人でしたが今後はできれば１家族に１人の方が良いのではないでしょうか。そのほうが相手の方もまた私たち日本人同士も気を使うことなく，より十分な理解・親睦がはかれるのではないかと感じました。２つ目は，視察日程についてのご提案です。全日程の９日間の内４日間はセント・ピーターズバーグ市との親善に費やしましたが後の３日間は(私費ではありますが) 観光ツアーでした。しかも旅行社主導の，回り道の多い，遠く離れた州の観光だけに疲労も大きく，それであればもっとセント・ピーターズバーグ市を理解することに時間を費やした方が良いのではないかと思いました。私たちの訪米の目的はあくまでも親善交流であって，市民を代表して親善大使という使命を果たすべく行なったのですから。

しかしながら今回の第一回訪問は非常に有意義でありました。この全日程のなかで問題も事故も何事もなくセント・ピーターズバーグ市との親善をはかれたことは吉岡事務局長をはじめ関係者の方々のご尽力であると深く感謝いたしております。これからも２回目，３回目と，この親善大使が日米の理解のために大きく貢献できますことを望んでやみません。

# 「市民親善使節団」として

塩　津　陽　子

青い空，青い海。太陽の恵みをいっぱい浴びた美しい都市，セント・ピーターズバーグ。私が今までに訪れた中で，最も温やかで心和らぐ都市でした。ホストファミリーもとても親切で，私たちを本当の家族のように扱ってくれました。

また，フィッシャー市長をはじめ市議会議員の方々，訪問した各施設の方々，皆さんとても快く私たちを歓迎して下さり，心地良く過ごすことができました。心より感謝したいと思います。

さて，数日間の滞在の内に，いくつかの施設を訪問しました。図書館，美術館，そして高齢者施設（パームショアーズ）。すべての施設に共通していると思われるのは，使用する側の立場になって工夫されているところでした。特に，パームショアーズでは驚くことや勉強になることがたくさんありました。

まず，施設の中がとても明るくきれいで，まるでホテルにいるような感じでした。また，さりげなく花や絵（住んでいる方々の作品）が飾られ，こまかい部屋まで暖かい心使いを感じました。そして何より強い印象を受けたのは，そこに住んでいる人々の表情が明るく，皆さんオシャレで，生活を楽しんでいることでした。日本の施設との大きな違いを感じるとともに，日本にも高齢者の方々が楽しんで生活できる所を提供して欲しいと思いました。

三泊という本当に短い滞在でしたが，得る物は大きく，今後ともセント・ピーターズバーグと姉妹都市として仲良くしていきたいと心から思いました。

思い出多いセント・ピーターズバーグに心を残しながら，オーランド，ラスベガスへの観光となりましたが，グランドキャニオンではまた一つ大きな思い出ができたと思います。大自然のパワーを間近に見て，自分でも不思議な感覚が身体全体に伝わっていくのがわかりました。心が自然体に，とても素直になっていくのです。物言わぬ大自然の力を感じる一瞬でした。私はこの時，力まず前を向いて歩いていこうと心に深く刻みました。

最後に，観光の内容が私たちの意見を取り入れられず一方的に決まっていたということに不満を感じましたが，それを越えるだけの感動をいっぱい頂きました。

今回の市民親善使節団の団員の皆様，そして，多大なお世話を頂きました吉岡事務局長に心より御礼を申し上げたいと思います。
本当にありがとうございました。

# 姉妹都市にホームステイ

藤　本　美佐子

一度しなくてはと思っていたホームステイを姉妹都市の一つであるセント・ピーターズバーグで経験しましたが，スケジュールがいっぱいでゆっくりできなかったのが，とっても残念です。８日間が一ヶ月間に感じられるほど，長くアメリカにいたような気がしますが，ふりかえってみて，人との触れ合いがあったようであまりなかったように思えます。一緒に行った人たちの印象の方が強かったからでしょうか。このような旅でないと行けないような所をいろいろ回れて，それはとてもよかったのですが，バスと車での移動なので，街や人々，空気を感じることができなかったのが，私としては物足りない，もっと歩いてみたかったというのは欲張りでしょうか?

姉妹都市になって，そろそろ40年になるということですが，知らない人がたくさんいるのではないのか？関係している一部の人だけの姉妹都市クラブのようなものではないのか?市と市の面の交流というより，点と点が１本の線でつながっているだけのような感じを受けました。前年にセント・ピーターズバーグの市長が高松に来られたことを，私は知りませんでしたし，今回高松の市長がセント・ピーターズバーグの球場で始球式まで行ったのに，翌日の新聞にのっていなかったりしたことは，一体何だろう？さびしいものがあったのは私だけだったのでしょうか?

この夏我家にホームステイしたディビットとそのお母さんに会えたことで，私個人の線を実感できましたが，もっと，いろんな分野の人たち，物，文化などの交流の線を太くしていって，誰でも渡れる橋にしていけばよいなあと思いました。

役所の苦手とする発想の転換を，市民のアイディアで変えていかないと，いつまでたっても，みんなの橋にならないような気がしました。私の期待が，大きすぎただけかしら。

# 姉妹都市セント・ピーターズバーグ市を訪ねて

丸　浦　静　香

姉妹都市セント・ピーターズバーグ市への市民親善使節団のお話を初めてお聞きした時，私の心はときめきました。そして是非行かせていただきたいと切に望みました。というのは，昨年セント・ピーターズバーグ市長夫妻はじめ６人の代表団の方々が高松に来られた時その方々にお会いし，又その中のお二人のホストファミリーをさせていただいていましたし，それに私は，一昨年の８月に主人と二人でアメリカ旅行をした時，セント・ピーターズバーグ市に行き市役所を訪問しました。そして何の紹介状も持っていませんでしたが自己紹介だけでバージニアさんにお会いすることが出来ました。更に，驚き喜んだ事はフィッシャー市長様にも直接お会い出来たことでした。本当に夢のような出来事でした。その時は全くの個人的な訪問でしたが，今回は公式訪問でしたので是非そのプログラムに参加させていただきたいと切望しました。幸いその希望が叶って姉妹都市セント・ピーターズバーグ市への市民親善使節団の一員に加えていただいてどんなに嬉しかったかしれません。

９月26日の朝JR駅前から貸切バスに乗って高松市長様と代表団の方々，そして市民親善使節団の皆様と御一緒に一路関西空港へ。夕方４時にノースウエスト機にて関西を出発。アメリカ時間９月26日21時41分タンパ空港着。夜の遅い時間にもかかわらず空港にはフィッシャー市長御夫妻はじめホストファミリーの方々がお出迎えして下さっていて感激しました。翌27日から28日まで，セント・ピーターズバーグ市長表敬訪問をはじめ多くの公式行事が始まりました。二つの図書館見学，二つの美術館見学，記念植樹，高齢者施設見学，エマニュエル・ルー氏の御自宅でのガーデンパーティ，レストランでの歓迎昼食会など一つひとつのプログラムがよく準備された心のこもったものでした。最後の日の球場レストランでの答礼宴は大変興味深く印象的でした。ちょっと型破りのようにも思えましたが，両市の市長様はじめ市民たちがうちとけあって心を通い合わせて交流が出来たことは本当によかったと思いました。それからもう一箇所，感銘深かった場所は高齢者施設のパーム・ショアーズでした。誰にでも訪れる人生の終りの部分をあのような明るい美しい場所で心の行き届いたケアを受け，よい友だちにも恵まれて過ごす事が出来るのは本当に幸せな事だと思いました。そして短い時間でしたが，私たちが，そこで暮らしていらっしゃる方々と直接お交わりすることが出来て嬉しかったです。ホストファミリーの事については，昨年高松へいらっしゃった代表団の中のお二人で，私の家にお泊まりいただいたワーラス御夫妻のお宅に今度は私が泊めていただいてとても嬉しかったのですが，その方々ともう少し御一緒に過ごす時間がほしいと思いました。その点が少し残念でした。

今回このような名誉ある素晴らしい機会が与えられました事を，心から感謝いたしております。本当にありがとうございました。

# マイ サンシャインブリッジ

渡　邊　多恵子

セント・ピーターズバーグ市と高松市，その違いはやはり広さ，建物も道路も，ゆったりと広い面を見せるセント・ピーターズバーグに比べ高松は，ビルディングやマンションが点在し，高さで連なっている。見学できる日数は二日という制約の中でバスでの移動，面の中を点と点で動いた感想をまとめるのはとても困難，ウーン，一つひとつはあげられるのだけど。

ＵＳＦ図書館の開放感，ダリ美術館のインパクト，そしてマダム・エレノアにお目にかかれたときは，拝みたくなるほどの感動だった。ミラーレイク図書館は英国風の重厚さが素敵だったし，パームショアーズはスウィートなスウィートな老人ホームだった。ファイン・アート美術館の気品とさりげなさはミセス・エマニュエルとぴったりでトロピカーナ球場ではミセス・フィッシャーの可愛らしさにゲームより目を見張ったのである。

私のホストファミリー，お一人なのでホステスとお呼びするほうが適しているんだけれどプロフェッサー・ベイカーはとても良く働く方だった。アメリカのキャリアウーマンである。とても優しくて親切で，そしてその綺麗な笑顔の裏に一生，自分一人で生きていかなくっちゃいけない心構えを見せていた。「暇もなければお金もない，クリスマスを一緒に過ごすボーイフレンドもいないのよ。」「でもヴィッキー，あなたは大学教授だけれど，私なんか，つーまらない日本の主婦よ。」「いいえ，タエコ。あなたは決してつーまらない主婦じゃないの。」そう言われてもこの旅が終われば，また狭い自宅兼教室で毎日毎晩，子どもに英語を教えていかなければならないんだもの。ああ日本に帰りたくないなあ。実は私は外国に出るたびに，帰国拒否症になり足が進まなくなる危険人物である。（今回のメンバーは変な日本人が多かったので，あっけにとられて帰って来てしまったけれど。エーッ，ウソウソ，ゴメンネ）

そして，楽しかった旅は終わり，わが教室にまた黄色いハローの一団がやってきた。幼稚園クラスの子どもたちには，ピアで買った砂と貝殻が入った小さな袋……。それだけなのにそれを手にした時のみんなのパッと輝いた顔。私には本当に眩しいきらめきだった。この子たちを見ると，フロリダのあの海と太陽の輝きを思い出す。ヴィッキーが言っていた。「お天気がいい日には，私の家の前のこの道からサンシャインスカイウェイブリッジが見えるのよ」って。私にはサンシャインスカイウェイブリッジのヴィッキーの家の対岸にこの子たちがいるような気がしてならない。世界を渡り歩いてきた私のかつてのボスが言っていた。「一人の秀才を作るより，君の周りの地域全体のレベルをあげることを心掛けなさいよ。」私は，この言葉は，そのまま市の国際交流室および国際交流協会の目指していく目標だとも思ってます。行政も親善もいろいろあるけれど，でも，でも，セント・ピーターズバーグには高松の子どもたちの夢があってほしい。あれだけの砂でさえこんなにキラキラ目を輝かせるんだもの。帰国拒否症の主婦だけど私のまわりのこの子たちのために働いていけたらなあと思い，今日も黄色いハロー集団の出没を待ちぶせているのである。

# 国際交流 Share する喜び，Link する力へ期待

(財) 高松市国際交流協会
事務局長　吉　岡　御井子

高松市とアメリカ合衆国フロリダ州セント・ピーターズバーグ市が姉妹都市の提携を結んだのが1961年10月。それから38年の歳月が流れていることを知り，改めて両市の関係の長さに驚いている。継続は力なりの言葉どおり，おそらく，両市の交流に関わってきた人たちの陰なる国際親善と交流，ホスピタリティ等，いろいろな面で力を頂き，又，交流の輪が広がり，力となってきているのであろう。今までの主なセント・ピーターズバーグ市との交流は，行政研修生の派遣，高松第一高等学校への英語講師受け入れ，親善研修高校生短期受入や，市民親善使節団派遣等がある。

今回は，来年開催予定の姉妹都市40周年記念事業を前にしての高松市代表団（6人）の訪問にあわせて，市民親善使節団10人が派遣される運びとなった。(財) 高松市国際交流協会の事業の中で，特に海外からの受け入れ家庭となってボランティア民際交流の力になって頂いた方の参加者であった，セント・ピーターズバーグ市は，私は勿論，ひとりを除いて初めての訪問であったので，各々が力の入った思い入れの深い海外研修となった。

フィッシャー市長表敬訪問の後，両市長による記念植樹に立会い，私達も記念植樹のクワ入れできたことは印象深い。ダリの美術館や図書館等も訪問し，わずか3日間の Stay は，すべて駆け足ながらも充実した。もう少しホームステイプログラムを延長して欲しいとの声も聞いている。また，一家庭一人の受入が大人としてベターであり，多くの受け入れ家庭の広がりにもなり，両市にとっても民際交流の輪を広げて行くためのきっかけになるので，今後の課題である。

トロピカーナ球場でのデビルレイズ試合観戦は，高松市長の豪快な始球式で始まった。二階のレストランでは，フィッシャー夫妻との野球談義に始まり，来年に向けての親善交流や40周年に又会える楽しみなど，スポーティな服装で，フレンドリーに交流して頂いたことは米国的で思い出深い。これが本当の親善交流と実感した。

この度のセント・ピーターズバーグ市の親善交流で学んだこと，気づいたこと，10人の団員が各々のホームステイ体験で得たことなど，互いに share されていく喜びのなかで今後は，これを機に残念ながら時間等の制約で訪問，研修できなかったエッカード大学，小・中・学校関係，ボランティアグループとの交流などともリンクして，広く民際交流の輪を広げて行く必要がある。高松市を海外へ強くアピールし，多くの人を歓迎する時代が来ている。サンポート高松の国際会議場も近く設備され，いろいろな型での受け皿が出来てきている。Link して日米国際交流の力を更につけるときがきている。来年の40周年記念事業を，充実したものにする期待を寄せ，今回の研修をフィードバックしていく責務を感じている。

Takamatsu International Association
財団法人 高松市国際交流協会
〒760-0017
香川県高松市番町1丁目11番63号
TEL(087)837-6003 FAX(087)837-6005
E-mail:tia@kgw.enjoy.ne.jp